

ひとはつうしん

(字:水田淳也)



社会福祉法人 ひとは福社会

〒739-1203

広島県安芸高田市向原町長田1857番地

TEL(0826)46-2960 FAX(0826)46-4355

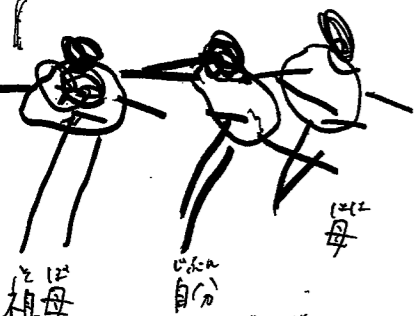
春爛漫とはいえ、コロナの不安はいまだ解消されないままです。どうか皆さん、十分に配慮しながら日々を過ごしていきましょう。

さて、福祉の現場には今年度から各施設に虐待防止委員会の設置が義務付けられることになりました。ひとはとしても昨年度末からその準備をしているところです。

正直なところ、防止委員会の設置は不可欠ですが、心には釈然としないところがあります。なぜなら、福祉とは、すべての人が人として当たり前生きていく上での人権を保障することが第一義だと思っからです。私たちの社会では、差別と偏見のために生きづらい思いをしている人たちは多くいます。その人たちの思いを共有し、実践と運動を展開することこそ福祉の現場に課せられた使命ではないでしょうか。

そのため、ひとはでは今年度から虐待防止委員会とともに権利擁護促進委員会も設け、両輪としてひとはの運営理念である「誰もが共に暮らせるための自分づくり・地域づくり・社会づくり」に取り組むたいと思っいます。

(理事長 寺尾 文尚)



(絵:水田淳也)

4月号からの題字は、作業所の30歳になった水田淳也さんが担当します。絵を描いたり、自分の名前を書いたりしている中で、題字にも挑戦しました。

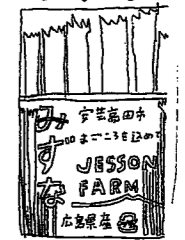
フィリピン出身のカタクタン・ジェスンさんと矢野智美さん夫妻にインタビューしました。ひとはにお米を卸してくださっており、ミズナ栽培もされています。

○向原町への移住のきっかけはありますか？

私たちは韓国の大学でボランティア活動をしている中で知り合い、結婚をしました。妊娠、子育てという家族の次のステップとして、一つの地域に根差して生活がしたいと思っ、空気がよくてお米作りもできる、子育てにもいい環境だと感じ、ここに決めました。

○ミズナ栽培を受け継いだと伺いました。栽培は順調ですか？

日本に来るまではミズナを食べたことがなかったのですが、地域の田植さんに出会い、基本を教わったので、今は家族とふんとか頑張っいけています。



(絵:高伏洋和)

○以前「自分たちが作っているお米をどんな人が食べているのか知りたい」という思いでひとはに見学に来ていただきましたが、印象はいかがですか？

今まで自分たちがボランティアをしていた施設の雰囲気を思い出し、皆さんがお互いに手伝って(支え合っ)生活されているのが良いなと思っました。いろんな人が集まっ、よりよい生活を送れるようにと目標にしている所が、以前フィリピンでボランティアをした施設と、ひとはは似ているなと思っました。

○お二人はどんな言語でコミュニケーションをとられているのですか？

韓国語や英語、日本語を混ぜています。子どもたちは日本語です。



(絵:高伏洋和)

ジェスンさんも智美さんも笑顔の素敵なお二人で、とても親しみやすい方々だと感じました。ひとはまりという地域とのつながりの場が作れないことは大変残念ですが、ひとはの川向こうに住まっいて、とても身近にいらっします。

「気分は親」

ひ と は
 数年前、とある人とこんな会話をしました。「入社してくる人より、親の方がワシと歳が近いんで!」「確かにそんな歳になってきたの~」(その頃はどこの上の空...)それが今では、まさに自分たちの子ども世代の人が新人として入ってくるようになりました。そのスタッフ達を見る目はまさに親です。気分は永遠の20代だと思っても、30年過ぎた今では、実際のその頃の気持ちは薄れてしまっていて、彼らの気持ちは通じ合えないかもしれません。が、しかし!親の気持ちは分かりますよ!そのうち「ウザい」と言われるとかするかもね!

(共同ホーム 幸川 理)

「手洗いをアップデート」

ひ と は の
 ひとはぼろこの手洗い場は玄関からは少し遠く、毎日の手洗いが楽しみになればと、非接触型のハンドソープディスペンサーを購入しました。はじめは、手を差し出すと泡が出てくる様子にびっくりして手を引、込める子や、びっくりはしないけど、このくらいでいいかと途中で手を引、込める子もいました。「泡が出終わるまでは手をそのままにね」と声をかけ、最近では、もこもこ出てくる泡を楽しみながら手洗いをしています。

(ひとはぼろ 数田(高松)悦子)

「1年ぶりの」

日
 約1年程の育休を終えて再び作業所に戻ってきました。みんな覚えてくれるかなーとドキドキしながら行くと、笑顔でハグの三上さん、「新川さんのこと覚えてたよ!」と言いつつ話す黒瀬さんなど、あーこの感じこの感じと懐かしい気持ちとともに、じわじわと嬉しさがこみ上げてきました。復帰から3ヶ月が経ったのですが、やっと仕事のリズムにも慣れてきました。少しづつ思い出していき1年前よりもパワーアップしていきたいと思っております。

(ひとは作業所 田端(新川)乃亜)

語り継ぎたいこと

おーい 聴こえますか 改訂版

Schwaの、
 音楽が好きじゃ
 なんぼ母きども
 10中聴いどろは
 遅いんでえ。

沙登志さんがひとには加わった時、重廣さんは彼のお母さんを捕まえて、「沙登志くんが仕事をせずに音楽ばかり聞いている。家でどういうしつけをしているのか。」と詰問。お母さんからそれを聞いた時、正直言って非常に困りました。それから、疑似体験をしたり、沙登志さんの大変さを理解してもらおう機会を作ったりしながらも、どうしたら良いか迷っていました。特に重廣さんは自己中心的と思っていましたから。ある日、いつものように音楽を聞いている沙登志さんのそばで仕事をしていると、重廣さんがゆっくりとやってきて、静かな口調で「沙登志くんはのう、音楽が好きじゃが、なんぼ好きでも1日中聞いとるんは遅いんでえ。沙登志くんの仕事を考えちやるんが、寺尾さんの仕事じゃろうが。」と。この時の感動は、いつまでも忘れることが出来ません。本当に彼らはすごいなあと思えます。いざとなったら、必ず皆のことを考えています。

Schwaの事も
 寺尾の事も
 じゃろうが。

編 集 後 記

就職した当日から使い続けていたテレビの調子が悪くなってきたので、買い替えるべく電気屋さんへ。店内には高校生らしき親子連れがちらほら。新生活に向けて買い物にきているのがわかり、門出の季節を感じた。初々しい姿にどことなく気分が晴れて帰宅すると、こちらも引越作業をしている親子に遭遇。密かにエールを送った。

(白井くみこ)